

新たな事業を切りひらいてきたのは、機を見るに敏な‘決断力’。 背景には家族の絆、そして従業員への感謝の心。

株式会社 桜島 (垂水支部)

クルマ1台の運送事業から飼料製造業参入。そして高隈山系がはぐくんだ名水事業への進出と世界コンクールでの入賞。「地の利と人の縁」に感謝を捧げながら攻めゆく事業展開には、運命の女神も味方して。



代表取締役 山元 一正さん

株式会社 桜島

本社/垂水市海潟668-1
代表取締役/山元一正
社員数/58名
保有車両/66台



昭和43年、個人企業として山元一正氏が創業。当初の主な事業は山川港へ鯉の餌を運ぶほか、ゴルフ場の芝の運搬。芝運搬は収益を上げたが、雨が降るとクルマに積んだ芝は泥だらけになる上、重量も増えるため、過積載違反は毎度のこと。多忙のため寝不足による居眠り運転、不注意などによる事故も日常茶飯事だった。「利益はありましたが、(事故や違反と縁を切って)子どもたちに胸を張って生きたい、お客様にもっと喜ばれたい、という思いがありました」。

そんな創業期の混沌を乗り越え、昭和57年、有限会社桜島運送として法人化。昭和60年に志布志にG.S.を出店したのを足がかりに昭和62年、九州昭和産業(株)志布志工場内に分室を開設。飼料の配送だけでなく、製造ラインも請け負う事業に参入した。一気にトラックを40台増車、フォークリフト10

台を投入、従業員も20人から60人へと増員した。「ほんとにもう一大冒険でした」。事業は軌道に乗ったが、新規の従業員が増えるにつれ事故や違反も増加し、新たな事故防止対策と安全意識の向上に迫られた。警察署からのアドバイスを受け、対策として設けたのが、認定車両制度。県トラック協会の飼料畜産輸送部会副部長も務める山元氏は、部会内で毎月勉強会を開き、安全意識やサービス向上の啓発に努め、優良事業所の車両は認定車両として登録する仕組みをつくった。取り組みの結果、豚の口蹄疫、豚コレラ、BSE、鳥インフルエンザの流行時等にも、県畜産課と連携し、県ト協の飼料畜産輸送部会内では迅速な連絡態勢が敷かれてきたため、都市圏で他県ナンバー車両が荷受け禁止の時期にあっても、鹿児島ナンバーのクルマは通行できるほどの信頼を勝ち得た。

志布志での飼料製造・運搬で大きく飛躍した山元氏は平成7年、二度目の大きな転機を迎える。名水掘削へのチャレンジだった。「ガネ水(赤さびだらけの汚水)が出るか、名水が出るか運任せでした」。約5億円を投入した後、地下1,117メートルから湧き出る硬度2の超軟水「樵のわけ前1117」を掘り当て、平成8年、新規事業の名水事業部を立ち上げた。これを機に、創業当時から山元氏と会社を支えてきた妻のタヨ子さんに加え、長女の村田正子さん、次女の高橋和代さん、長男の猛志さんの3人が相次いで事業に参入した。総務全般、取引関係、情報処理と品質管理、とそれぞれの個性がいま経営の主戦力となっている。

事業立ち上げから10年目の今年、「樵のわけ前1117」は、世界の食のコンテスト‘モンドセレクション’で最高金賞を受賞。同時

にヨーロッパのシェフらが審査する国際味覚・品質審査会(iTQi)で優秀味覚賞を受賞した。山元一家は「10年目のご褒美」に喜びながらも、今後も変わらぬ品質の維持を誓う。

山元氏の理念は「家族と、一生懸命ついてきてくれる従業員は大切にすること。『ドライバーは私の見えないところを走っているから』と、社長自ら朝晩神棚に手を合わせ、毎月全車両に清めの塩を撒き、無事を祈る。また今年7月、豪雨による北薩の被災者らに同社から水が送られたことは記憶に新しいところ。事業では機を見て敏に攻め、陰では人に感謝の念を尽くす、という山元氏の生き様が、そのまま同社の企業理念を示していると言える。



本社事務所と従業員の皆さん



イエローとグリーンがシンボルのトラック



多くの車両を保有する志布志営業所



ベルギーで行なわれたITQ授賞式の様子(左から2番目は取締役の山元猛志さん)



ダブル受賞した「樵のわけ前1117」



全国へ向けた出荷作業の様子